

### Ⅲ分野 第10分科会

#### 地域をつなぐ自主活動

司会者 三宅 明 圓田 元彦

記録者 松村 真紀 上垣 勇人

小柴 美穂

報告者Ⅰ 岡本 文穂（東播磨）

宗教団体として認め合う地域づくり

～ムラのお母さんとの活動から～

報告者Ⅱ 山下 淳子・寺田 典子（阪神）

フィールドワークから差別解消へ

～歩く、知る、語る、つながる～

報告者Ⅲ 房安 勝利（西播磨）

住みよい半田校区から住みたくなる

半田校区にしよう

#### 1 研究討議の概要

##### <報告Ⅰについて>

**司会** 報告の中で劇も見せていただいたが、質問や意見をお願いしたい。

**西播磨** 「僧侶としての人権感覚」について、もう少し詳しく教えてほしい。

**報告者Ⅰ** 宗派の中でも都道府県によって人権感覚のとらえ方が異なるが、末寺の住職も人権問題について考えることで、檀家に対する啓発にもなる。人を尊重する姿勢は、仏教だけでなく宗教の根底にあるべきである。今後、部落差別について徹底していきたい。

**但馬** 部落問題を50年程前に勉強した。今は部落差別が解消されていると感じていたが、今も悩んでいる人がいることがわかった。

**木の実学級** 結婚問題になると根深く残っている。部落差別解消推進法が施行されたことから、学校でも正しく教えてもらいたい。そして、孫の代までこの問題を残したくない。

**阪神** 差別を受けた人の生の声を聞く機会が減り危惧することは、若手教員が部落差別についてどれくらい理解しているかである。

教職員との交流学習「木の実学級」について、もう少し教えてもらいたい。

**報告者Ⅰ** すべての先生が思いを一にする

ために交流学習を行った。先生だけでなく、若い人みんなに正しく理解してもらいたい。

**司会** 主体的な取組をどのように展開していくかについてご意見をいただきたい。

**阪神** 60年程前には同和教育がなく、親から地区の話を聞いて育ったが、自分自身は差別をしていないと思っていた。しかし、我が子が地区のある中学校に行くことになった時、自分の中で差別意識が出た。この出来事があったからこそ、30年以上同和教育に取り組むようになった。子どもには、正しく理解してもらいたいし、先生方には子どもたちに正しく教えてもらいたい。

**司会** 学校教育における取組や地域との連携等についてご意見をお願いしたい。

**阪神** 若手教員だけでなく、ベテランも部落問題について理解しているとは限らない。部落問題の難しさは、差別の歴史を学ぶだけでなく、教員が親の葛藤をどうとらえているかが大切である。ベテラン教員として、地域の方から生の声を聴いたり、フィールドワークに参加するよう声掛けをしていきたい。

**報告者Ⅰ** 教員との交流での効果は、これまで消極的であった教員に部落問題に取り組むことの大切さを痛感してもらえたことである。これも若手教員へのアプローチである。

**但馬** 国際結婚も進む中、日本を恥じないような国にしたい。部落問題は、作った人間が解決していかなければならない。

**但馬** 教員時代に解放学級に関わった。その頃は顕現教育にも熱心に取り組まれていたが、だんだん薄れてきた。親から、「そっとしておいてほしい」という声もあり、地域の方の思いを共有することが大切である。私たちに何ができるのかを常に考えていく必要がある。

##### <報告Ⅱについて>

**司会** 報告に対しての質問や意見をお願いしたい。

**阪神** なぜ「ふきのとう」を結成して取り組もうと思われたのか。

**報告者Ⅱ** まず母親が勉強して、子どもたち

に伝えたいという趣旨である。地域には、父母の会があり、子どもが高校までは親の学ぶ場があった。それ以降は学ぶ場がなくなるので、「ふきのとう」を立ち上げた。

**阪神** フィールドワークをやっていることは知っていたが参加したことはない。地域の中にも、参加する機会がない人もいる。学習の機会をカバーするため、行政によるサポートは得られているのか。

**報告者Ⅱ** あまり協力が得られていないのが現状である。「ふきのとう」の立ち上げの時は、隣保館の職員が関わってくれていた。

**阪神** 教育委員会では、立ち上げ時にコース選定、地図の作成等に協力し、フィールドワークにも参加している。

質問として、地区の方々にフィールドワークが行われることを事前にお知らせしているのか。また、フィールドワークを継続する上で、協力してもらえる方々が必要ではないか。

**報告者Ⅱ** お知らせはしていないが、フィールドワークに参加した先生方が子どもたちに還元してくれていることを考えると、理解してくれていると思う。今めざしていることは、親の会等を巻き込んで地域のことを理解している人を増やしていきたい。また、子どもたちは、学校で正しい知識を身につけている。学べていないのは大人である。一人でも多くの人が参加してもらえるようにアナウンスすることが私たちの役目である。

**阪神** 人権教育を先生方ばかりに任せておくのはいけないと思う。子どもたちに伝えていくのは先生かもしれないが、大人もしっかり学んでいく必要がある。

皆さんに、職場等で実施する部落差別に係る研修等についての取組を伺いたい。

**東播磨** 三木市では、1年目の職員、全職員、部署ごとなど、各年2回人権研修を実施している。また、自治会住民学習を実施する際には、職員が助言を行っている。

**淡路** 淡路市では、人権講座を年5回実施し、各自が年1回エントリーして受講する。

**東播磨** フィールドワークは、頭で考えるだ

けでなく五感で物事をとらえることができる学習方法である。しかし、同和問題に熱く取り組んだ頃からみたらかなり薄まっている。学ぶことをやめると差別が残り、悲しい思いをする人が出てくる。みんなが住みよい社会、誰もが幸せになる社会、そんなことを信じて新たに取り組を始めるのもいいのではないか。

**報告者Ⅱ**（フィールドワークに参加した子どもの感想が報告される。）

**阪神** 人間としてどう生きていくか、どのような感性を持って人権教育に取り組まなければならないかなどについて学びたくて、このような場所に足を運んでいる。熱い思いにたちかえる、そこからがスタートであるという思いで聞かせていただいた。

#### <報告Ⅲについて>

**司会** 報告に対して、質問や意見をお願いしたい。

**阪神** 半田小学校が「人権・同和学习」の分科会で発表されているが、小学校との連携や学校での立ち位置を教えてもらいたい。

**報告者Ⅲ** 半田小に校区民主化推進協議会（民推協）の事務局がある。校区には16の自治会があるが、自治会長は校区民推協の運営委員や指導的立場を務めており、学校とはしっかり繋がっている。小学校のすべての子どもを対象とした交流事業「半田ゆめクラブ」も小学校と連携して行い18年目である。

**西播磨** 半田小の全校児童数154人で、前回の「半田ゆめクラブ」参加者数は120人程であった。卒業した高校生や大学生もボランティアとして応援にかけつけてくれている。半田小では、校区民推協の支部長や自治会の皆さんと手を携えて人権課題の解決に向けて取り組んでいる。

**司会** 各地域で人権に係る団体等と連携した取組がありましたら教えていただきたい。

**報告者Ⅲ** 「ライフデザインいぼがわ」の活動として、人権学習等で使う人権啓発支援資料を毎年作成している。また、その資料を基に人権劇を作り、2月に開催する「人権を考

える市民の集い」で公演を行っている。さらに、小中学校を通して詩を募集し、詩集を制作し人権啓発に活かしている。また「ゆめクラブ」については、旧揖保川町の3小学校すべてに立ち上げ、交流活動を充実させている。

**司会** 他の地域の実践もお聞かせください。

**阪神** 平成15年に解放学級が終了、継承した地域学習を年8回実施し、文化「シャコ踊り音頭」（三味線や和太鼓等）の継承や学習会などを行っている。

閉校した芦原小学校（現総合教育センター）に歴史資料を集約し、フィールドワークの際には、芦原の歴史を見てもらっている。今後の課題として、若い人を育てることである。

**司会Ⅰ** 「仲間を広げていく」「若い人を巻き込んでいく」がキーワードになっているが、引き続き実践に向けての提案をお願いしたい。

**西播磨** 今から20年近く前に報告Ⅲの取組に関わっていた。当時は、人権教育の推進にあたって、みんなが知恵を出し合い、力を合わせて取り組んでいた。また、研修会では自作資料を使って参加型の学習会を実施していた。主体的で地道な取組の積み重ねが今につながっていると思う。ライフデザインについても、メンバーが増え、より幅広い年齢層から構成され、取組の広がりを感じている。

**西播磨** ライフデザインでは、若い人に声をかけ取組を見てもらうことで、一緒にやってみたいという人が現れる。大事なことは、地道な取組を続け、地域・学校等が協力することである。リーダー（人権アシスタント）育成にも取り組み、その方々が自治会住民学習会を企画実施する。リーダーの中には、学校で子どもたちが結婚差別の学習をしているのを見て、住民学習会に取り入れた自治会もある。「続けていくこと」「行政等と協力して学習の場をつくること」を大切にし、今後も地域のリーダーを育成し、継承に繋げたい。

## 2 総括と今後の課題

総括として、次の3点である。

一つ目は、3つの報告に共通している点と

して、長期間継続することの重要性である。報告Ⅱのフィールドワークで地域の了承を得なくても問題が発生しないのは毎年実施しているからこそではないか。継続することで地域とのつながりが大きな力になっている。

二つ目は、若い人への伝え方である。伝承等に関わろうとしている地域のリーダーがいることで子どもたちにも伝えることができる。また、学校園での同和教育が低迷した時期もあったが、人権関連三法ができたことで原点にかえり、学校現場で同和教育の解決に向けて取り組むなか、地域と学校園の連携が、今後一層の役割を果たすと考えられる。

三つ目は、単なる歴史に学ぶのではなく、今の地域の現実から学ぶことが重要である。さらに、これに取り組む自主活動の企画・運営は粘り強く継続していく必要がある。

今後の課題として、自主活動に関わる人の輪をどのように広げていったらいいのかという人材育成がある。これについては学習の場を粘り強く作り続けることである。学習会に参加することでいろんな方に出会う中でより深く考えるようになった方がおられるなど、場をつくることで人が集まり、関心を持つ人が増えていくと考えられる。

学習会の一場面で自分の思いが伝わらない現実に戸惑いを感じておられた方があったが、「学び続けている事でいろいろな方に助けられてここまで来た。」と励ましの言葉をかける方もおられた。

まだ部落差別の事例が今でもある事に愕然として強く訴えられる方もおられた。

どちらも永年部落差別に真正面から取り組んでこられた方々の意見である。一人一人が部落差別に対して何ができるか。常に問いながら、そして近くの人を巻き込み、一緒に考えながらできる範囲でやってこられたこのような先人の思いを大切にして、今後も精力的に部落差別解消に向けた自主活動が継続されていくことを確信した。